

## その5 アオドウガネとの闘い

今から5年くらい前だろうか。夏に、庭木の葉が見事に食べ荒らされているのを妻が気づき、コガネムシのような緑の虫を発見。職場の嶋田さんに相談したらアオドウガネでは、と写真を見て確認できました。食欲の旺盛さは半端ではなく、柔らかくて美味しそうなナツツバキ、さらにシャラ、もみじ、と広葉樹の葉なら幅広く選り好みはないようです。近所の家では、夏の夜、窓を開けているとムシャムシャ音が聞こえるとのこと。夏に向かい、今年も闘いの日々になります。我が家では昼間の外出時には必ず木を揺すり幹を蹴る(私)、そして落ちたところを踏んで瞬殺(妻)が日課です。元来は南方系の虫で北上しているとの話もあり、これも温暖化の影響? と勘ぐりたくなります。そういえば昔、クヌギの木を思いつき蹴り、ボロボロとクワガタを落として採る方法を長田(志朗)さんに教わったな～、懐かしいな～。(高橋基之)



## 会員のつぶやき

当団体では、埼玉県みどり自然課が今年度から始めた外来生物モニタリング調査に参加しています。3次メッシュごとの外来生物の有無を調べるものです。この調査が結構(かなり)楽しい! なんとなく散歩するよりどれだけ楽しいことか! 正直、夢中になっています(同定力は?)。調査の結果が共有され、何かの役にたつと思えることって素晴らしいですね! しっかり続けていきたいと思えます。(嶋田知英)

当団体が活動を始めて3年目、この間の出来事で最も印象深いのは、原市沼川のオオフサモの生態です。数回除去作業を行いました、最初はすぐに復活し、これはしぶといと思っていました。しかし、今はかなり繁茂量が減っています。とは言え油断できないので、綾瀬川など下流部を含め注視しています。

去年の夏、オオフサモの代わりにヒシが繁茂していたのも、自然の「取って代わる」現象が印象深いです。ヒシは定着できるのか? 経過をきちんと記録していきます。(脇坂純一)

## その6 セリバヒエンソウ(芹葉飛燕草)

昨年の5月、入間市宮寺のさいたま緑の森博物館で初めてこの花を見ました。精緻な青紫の花が涼しげに惜しげもなく咲いていました。葉は芹のよう、花は燕が飛ぶ姿、ティンカーベル、妖精のようです。キンポウゲ科ヒエンソウ属、明治時代に観賞用に中国から渡来した外来植物だそうです。約1年後、今度は浦和の住宅街の空き地で見つけました。どうやら急速に増えているようです。

先日、緑の森博物館で思わず摘んだこの花の先を持ち帰りました。水もなく好天のなか車の荷台で2時間余、ところが葉も花もピンとしたまま。一週間後はこのとおり。咲いていた花は結実し、次が蕾をふくらませ、今日は可憐な花が開きました。夏空を飛び交うツバメのごとき素晴らしき生命の力!(岡安玲子)



## その他のご案内

仲間に入りませんか  
～会員を募集しています～

NPO法人いろいろ生きものネット埼玉では一緒に活動して下さる方を募集しています。

入会をご希望の方は下記ホームページからお申し込みください。

<https://sites.google.com/site/saitamainenet/>

## いろいろ生きもの通信 No.3

- 発行日 2016年7月1日
- 発行 NPO法人  
いろいろ生きものネット埼玉
- 事務局 さいたま市大宮区大門  
3-205ABCビル303
- e-mail [iinenet.saitama@gmail.com](mailto:iinenet.saitama@gmail.com)

NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉

## Are Invasive Alien Species “WANTED” ?

外来植物には埋土種子に似たニュアンスがあります。人がからんだ何らかのルートで圏内にもたらされた外来植物の種子、その種子がどのように成長するかはそれが持つ特性と取り巻く環境との相互作用によります。環境とは、水分、光、生育空間、塩類などの要因のこと。それらが整わず種子のまま過ごすものもあれば、発芽して一代限りで消滅するもの、生活環が維持できたもの、中には溢れんばかりに大繁殖するものもあります。いずれもそれぞれの能力・特性に応じ、置かれた環境の中で最大限のふるまいを見せています。環境要因は自然的な要素が大きいのですが、逆に人為的要素の強いものもあります。例えば攪乱された土壌は外来植物が活路を見出す絶好のチャンスとなりました。シナダレスズメガヤは河川敷に侵入し、洪水や工事による土壌の攪乱のたびにその分布を広げてきました。「侵入」という言葉には「賊(悪事をなす者)が立入禁止の場所に無理やり入る」という意味があります。しかし、「悪意なく立入禁止域かどうかははっきりしないところを自由通行した」ような場合、これを「侵入」というにはやや抵抗を感じます。侵入というにはもっと確かな証拠が必要に思います。

外来植物は個性豊かです。一つ一つを精査し、現に確かな被害をもたらしている種に絞りを絞る、その背景と実態を分析する必要があります。それらの種の共通的特徴を並べます。①適応力が大きい。②生育が早い。③大群落をつくる能力がある。④繁殖力が旺盛である。①については残土埋め立て等の土壌攪乱、日陰、乾燥、富栄養のように在来種の生育が困難なところに分布を広げている実態があります。④については切れ端から栄養生殖で広がる水草の勢いに圧倒されますが、その切れ端製造に人はかかわっていませんか。

結果として諸症状が現れます。aオオフサモ・Azora・ミズヒマワリなどによる水面の覆い隠し。bセイタカアワダチソ



在来雑草に混じる外来植物ツノミナズナ。可憐な花を咲かせます。被害実態不明またはなし。(川島)

ウのように在来種と競合、さらにはその駆逐。cオオカワチシャやセイヨウタンポポのように近縁種との交雑による遺伝子攪乱。dオオブタクサなどによる花粉症発症。eアレチウリなどによる作物病気媒介。aについては、水温低下・作物生育不調・減収や、水流停滞、枯死による水質悪化・異臭、競合・駆逐が連鎖的に起きています。bについては、イタチハギやオオキンケイギクのように自然度の高い在来種集団の中に侵入(この言葉は適切かも)する例もあると聞きます。a~eは動物の食草やねぐらを奪うなどの二次的被害にもつながります。

このようなことを考えるとき、外来植物の評価は「恐れがある」ではなく「実態がある」ことに基づく評価でありたいと考えます。外来種の取り扱いについては実態調査が欠かせません。外来種がそこにあることで、まちがいなく過去そこに分布していた在来種のシェアは奪われています。埼玉県のモニタリング調査(平成28年3月)では、植生を種数でみると、全出現種数に対する外来種数の占める割合は、市街地43.2%、河川敷31.0%、水田・畑28.3%、雑木林24.5%でした。市街地を筆頭に、在来種は確かに圧迫されているというべきでしょう。しかしその実態は今一つはっきりしません。対処するにはまず相手の動静を見極める必要があります。

(牧野彰吾 いろいろ生きものネット埼玉理事)

## 東大秩父演習林のシカ

秩父演習林では、シカによる被害が甚大で、2008年4月に秩父演習林に赴任してすぐに何か対策を打たないと近い将来には大台ヶ原や丹沢のようになってしまうと危惧したものでした。7年間の在任期間中に、関係者の皆様のご協力もあり、シカの管理と研究に関して僅かではありますが進展することができましたので報告いたします。

埼玉県からの委託事業として国道140号の工事のための環境アセスメントを秩父演習林と東京大学の林学科が行いました。その際に、カモシカ生息数調査と一緒にシカの個体数を調べています。1989年からの3年間の調査では、シカの密度は全て1頭/km<sup>2</sup>未満でした。2001年の調査で初めて1頭/km<sup>2</sup>を超えたのですが、2006年には既に20頭/km<sup>2</sup>を超えていました。このように21世紀になってから急激に個体数が増加し、林内でシカの生活痕が目立つようになり、2005年ごろには下層植生の退行も認められました。秩父演習林では、クマガイソウ（埼玉県RDB種）の群落を守るためにシカ柵を設置しました。また、スズタケ群落は、標高が低い方から高いほうに向かって退行していくのが毎年目で見てわかるほどでした。



シカにGPS首輪を装着している様子

そこで、2010年ごろから以下のような計画のもとに進めてきました。まず、栃本地区を入川流域と滝川流域に分け、両流域間でどの程度シカの往来があるのかをGPS首輪で調べました。その結

果、オスでは長距離移動して戻ってこない個体もみられましたが、メスは他の流域に行っても数日で元の場所に戻ることがわかりました。このように両流域間でのシカの往来は限定的であることがわかったので、入川流域でシカの密度調整を行い、滝川流域を対象区として、植生を含めた生態系の回復の過程を調べることにした。そのために30m四方の正方形調査区を、柵でシカを排除した区とシカが自由に出入りできる区のペアで設置しました。これを滝川流域と入川流域にそれぞれ15ペアずつ作ったのです。植生が消失して時間が経過するとシードバンクが失われ、栄養繁殖するササ類なども再生しなくなります。これらの柵は従来の植生のレフュージアとしての機能も果たすことが期待されます。2014年冬からは、埼玉県と協力して、埼玉県が行う管理捕獲を秩父演習林の入



柵でシカを排除した調査区

川流域で行うことになったのです。

今後は、捕獲を行っている入川流域で期待通りにシカの密度が減り、植生の回復過程が明らかにされること、そして将来的には、滝川流域、ひいては奥秩父山地全体でシカの密度の管理が進み、植生が回復することに貢献できると願っています。なお、これらの計画の実行においては、多くをサントリー社の天然水の森プロジェクトによる協力で進めることができました。ここにお礼を申し上げます。（鎌田直人 東京大学北海道演習林長・教授、いろいろ生きものネット埼玉理事）

## 緑森の活動

さいたま緑の森博物館で雑木林の保全再生に携わって、早くも2年が過ぎました。年4回の作業では、アズマネザサ刈払いや常緑樹伐採のほか、シイタケの駒打ち体験も行いました。その甲斐あって、森林内はだいぶ明るくなりました。さて、今回、私たちが2年間活動する中で気づいた小さな問題について紹介させていただきます。

まず、「せっかく駒打ちしたのにシイタケの収穫ができない」ということです。昨年3月にほだ木を作り森林内に伏せ込み、今年の10月頃からシ

イタケが発生すると思われませんが、近くに住んでいる会員がいないため、毎日確認することができません。せっかくシイタケが発生しても、下手をすると収穫するときには全て乾しシイタケとなってしまいます。それでは残念なので、今年9月にほだ木を30cmに玉切りして、各会員に持ち帰ってもらうことにしました。雑木林の恵みを感じることで、活動への意欲が高まります。

次に、「道具の保管場所をどうするか」というものです。下刈鎌などは緑の森博物館でお借りす

ることができますが、刈払機などは自前で揃えなければなりません。昨年度までは、会で購入したものを特定の会員が保管し、活動のたびに、運搬していました。しかし、今年度中には県から物置の一角をお借りできる予定となりました。「ふらっと行って、ちょこっと活動する」といったこともできるので、雑木林の保全再生が一步進む予感がします。

また、今年度から、今まで不定期に実施していた活動を、会員が予定ししやすいよう「奇数月の最終日曜日」に固定しました。狭山丘陵の雑木林を健全な姿で未来に引き継げるよう、会員みんなで

## 第2回生きものフォーラム

当会では、生物多様性の課題について、多くの方々と情報や意見を交換する場として「生きものフォーラム」を定期的に開催することとしております。第2回目は次のとおり開催いたしました。

### 「外来生物アライグマの実態に迫る」

日時 平成28年2月14日（日）13:30~16:30  
会場 浦和コミュニティーセンター第15集会室  
参加人数 81名

#### 【プログラム】

##### ■ 基調講演

埼玉県におけるアライグマ・ハクビシンの生息・被害状況と対策 埼玉県農業技術研究センター 古谷益朗

##### ■ 生物多様性保全活動報告

###### ▽チームアライグマの活動

チームアライグマ（県立越谷北高校2年）岩木れん

###### ▽小川町のアライグマ駆除の状況

小川町環境保全課 岸 勇介

###### ▽アライグマによる生態系影響

埼玉県環境科学国際センター 角田裕志

##### ■ 質疑応答・フロアディスカッション

#### 【ポスター展示参加団体】

- 荒川の自然を守る会（上尾市）
- 児沢探検隊（東松山市）
- エコシティ志木（志木市）
- 埼玉県生態系保護協会岩槻支部（さいたま市）
- チームアライグマ
- いろいろ生きものネット埼玉

基調講演では、現在、農業被害や家屋被害が拡大しているアライグマとハクビシンについて、古谷さんが撮られた貴重な動画を見ながら、これらの動物の特徴や防除の取組と課題についての軽妙なお話しを楽しくお聞きすることができました。

活動報告では、県内・都内の中高校生で組織するチームアライグマの岩木さんから爪痕調査などの報告があり、問題意識の高さとしっかりとした

元気に、楽しく活動していきたいと思います。（牧野敏之）



緑森での除伐活動



活動に感心させられました。世代を超えて交流できたことは今回の大きな成果です。その後、アライグマの駆除の実態について小川町の岸さんのご報告、埼玉県環境科学国際センターの角田さんからはアライグマの生態系への影響についての国内外の事例と課題についてご説明いただきました。

質疑応答・フロアディスカッションでは、当団体の嶋田理事がモデレーターとなり、自治体アンケート結果の説明と各講演への質疑応答を行い、その後、外来動物問題をどう捉えるかという議論に移りました。アライグマ問題は結局は人間が起こしたもので、私たちは第2のアライグマをつくってはならないというご意見が印象的でした。

ご参加いただいた皆様、ご講演、展示いただいた方々、ご支援をいただいたサイサン環境保全基金様に心よりお礼を申し上げます。（星野弘志）



ポスター展示の様子